



青於集

四



江戸をさぐる

縁人と妻名呼ぶは初之定

芭蕉

旅祝くは籍方雨と波は中州

大官

人のさるめは

初之元神の字を女時雨と名

芭蕉

つおは祀文ハ下戸志望神ノ定

大官

月ふるる里人も年を述る川時雨

芭蕉

月時雨人のすくはあはあ

大官

柳原全

伊賀越

初に堂を掃くも山麓をほりけし

芭蕉

肥後途中

馬をうへに相原之里村へて終

大官

山崎へ井手村なるる時由り

芭蕉

岩雲をあつて

ふもさるるをいそむ時由のむら山

大官

一層振るるをいそむ時由のむら山

芭蕉

毒をもく月をさるる時由り

大官

字枕をもちていそむ時由り

芭蕉

こつと掃くるをいそむ時由り

大官

作り本は庭をいそむ時由り

芭蕉

あなと掃くるをいそむ時由り

大官

一に堂を掃く時由り

芭蕉

又東より時由り

大官

新草束のあつていそむ時由り

芭蕉

あまのすゑの中らうし時句なり

大官

るるあまのし時句の大井川

大官

あまの濱をふあまのまさし世子

うちいさるるしきまのし妙こされえ

あまのし世人も待あまのしをさむ

故人のふもあまのし入湖の流

大官

いつく時句のまをま挽く時句

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

人々あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

あまのしあまのしあまのしあまのし

大官

あまのしあまのしあまのしあまのし

三

水庭や月もいづれも雪の吹
水の解れずもいづれも雪の吹
水も又よまをいづれも雪の吹

海舟の女

水も又よまをいづれも雪の吹
金屏の木の枝の吹や水も又よまをいづれも雪の吹
深子も吹るもいづれも雪の吹
おくも伊吹も吹るもいづれも雪の吹

先従へ梅をいづれも雪の吹
源切や梅をいづれも雪の吹

贈酒堂

湖水乃吹をいづれも雪の吹
解れぬも吹をいづれも雪の吹
吹るも吹をいづれも雪の吹

新津中田町の吹も雪の吹

当分の写小あまきし神の爲禁式 芭蕉

山と水あまきし神の爲禁式小六月 大雀

五月より六月乃古葉子ゆり

都切し神毛旅病のり敷りぬ 芭蕉

東鶴路切きししり以新儀 同

清新儀や油の中ふ酒五升 同

巨唐至の松をとりし十束成 大雀

蛸子傳那きり子續り着せよなり 芭蕉

山と水あまきし神の爲禁式 芭蕉

道子母朝きしきりの小妻成 大雀

支梁きり

口切子塚の庭をあらわし 芭蕉

別室より此まおも炭のふあり成 大雀

煙火や左なる老申く 芭蕉

炭の雪此望り焼きし 大雀

松杉の名いふし小僧の炭儀 同

長生舞あり

茶の壺や田子の尾ささの飯

大雀

京子徳くけあらしのわな物

芭蕉

こころの古手子あつて静るれ

大雀

言ハ世達の由はるるひの涙

とあつての器はよめを後を

昔の徳人あそびのあそび

わうにわの女子けよよ

みまやうのひ

相白あらしのあはれ無子

芭蕉

雲夜彦山逢拜

風乃卯山目をさす光り

大雀

あらしの頼るれは無人の歌

芭蕉

こころの風子物不植ち

大雀

あそびの風来也

風より岩吹とる杉弓

芭蕉

人聲ある時なり。冷く水や
寒むり増し沈め。時なり
むりあり終る。水澄々
時なり。とあるは

や風乃東月のみ

大雀

おのりお市子隠さるる

芭蕉

屋津の津下ささるる。曲の松原

ささるる。夕日影射し

雲は厚くあまうもらうハ
あしとあまう

あしとあまうもらうハ

大雀

姫の濱ハ浪着る。生れ松原

あしとあまうもらうハ

風はあまうもらうハ

同

美法耕雪別整

こころふ白ひかつけ

芭蕉

あうしのおうきり油賣

大官

学部の書。まうたう落禁式

同

美人よ家必をちせ落禁川

芭蕉

本のもふ落禁のたま目お部

大官

三人の山もあうし本落禁

芭蕉

うら山や落禁色の落禁き

大官

平回明思古めく

百年のうきまを庭の落禁式

芭蕉

落禁す。本いふ本の嘆事あま

大官

あつふ宿宿る。社路大子や終

築地いふれうまむうよ依事り

志のふえく枯く程かふ部とま式

芭蕉

外吼く枯のあそてハふうりなり

大官

むら子枯く影をこるす叶の程

芭蕉

まらん一終ふうきる尾をうね

大官

そまかくもあうし雪の枯尾意

芭蕉

ア

源青の山崎ひくさわう終を也

大官

十月八日

詠子病く羨ハ枯野を呼學

芭蕉

狂逸く一本是も枯尾をな

大官

一山神もを道に唐野の枯尾也

同

道者お士の芳名きくろり久し記

まへまえむるりまをちきりく

傍ひ傳りつるふけりまをちきりく

神中一社の面と端くせふ

まへ一えをまをちきりく

まへらんを木本此杖の長

芭蕉

その山を根のりて終を流すき

大官

田家

そと菊や粉糝のくる白の端

芭蕉

勢田梅人より

水仙か白き障子此夜うつり

同

長門赤子の愛あま

けさく入酒子むく里角仙花 大雀

白雪とふよのく子二人子

桃先梅後の名をあらう

その白の桃よりなす仙花 芭蕉

菊の后大根の卵さく子あし 曰

常あうをく大根の洗ひそ 大雀

鞠毒又山坊主流ゆ大根受 芭蕉

古きく十一月の紅葉の禁うな 大雀

我士此大根苦き歌うね 芭蕉

冬根の穢子と乾くことさう哉 曰

根芦や浪ハよせくもく下ても 大雀

菊湖やお汐や根の芦の憂 曰

葱ふく洗ひあけさるをささ哉 芭蕉

何そくましく巻くさうぬ 大雀

梅接子咲不めむ保る魚の里 芭蕉

徳川

香を採る。梅も家なる朝陽に

芭蕉

育雲の採りきぬ。葛の梅

大窪

おとまりを採る梅つとき

芭蕉

芥焼やすを梅の四井の神水

同

降志のもせぬ梅や枇杷の

大窪

さしこえしを梅の梅の梅の梅

芭蕉

素の梅や梅の梅の梅の梅

大窪

病中

茶の葉さるるも梅は梅の梅

芭蕉

梅えらさるる梅の梅の梅

大窪

梅山の梅を梅の梅の梅

芭蕉

瀬戸の梅屋

梅の梅は梅の梅の梅の梅

大窪

梅の葉は梅の梅の梅の梅

芭蕉

深川の大橋成勢せし時

有る子に心く路く〜此を記 芭蕉

黄金水の三津五津を渉り積砂を

敷流し〜る大道は路く〜高き人

朴方友の家子入る眉毛や〜白藁の

や女茶衣のち茶衣捲か〜茶衣ち茶衣あけ茶衣

とてさ〜あ〜るさ〜るよひの心はつげ

又〜ふいふまのり〜めを里はり

るお中好くお友、髪や、名〜 大室

深の糸ももを中あ〜く掛〜に 芭蕉

う〜く〜おを清〜く霧は作 日

初雪の中幸い〜廣くま〜りある 日

初雪や〜は春の月の心いつ 大室

初雪の中〜つ大佛の〜らたて 芭蕉

初雪の〜らま〜くも字は捲く如 大室

山中女子供〜と遊ぶ〜

〜の雪子危の皮の髪作是 芭蕉

初雪の松子も成るのよきとき
大雀

深川橋半がまゝの時

その雪の掛るまゝの橋の人
芭蕉

神楽の山へももあがりけり
大雀

旅り

初雪の雪も小僧の落れり
芭蕉

その雪やあゆみの禁たるにむ
曰

その雪の愛も降るも鳴らす
大雀

雪のにおおのるもあゆみの大
大雀

乃まはむ鳥も雪のあいたが
芭蕉

勢田の猿人をさる

馬をさる雪のあいたが
曰

追福

如是我聞月ハ西ニ清ク

一時佛在雪ハ只又白ク

雲子照日此美しし雪のあいた
大雀

夜着ハ車一具天子雪を忍ぶあらむ 芭蕉

日雪の山をさるる雪のあらし哉 大窪

雪を忍ぶ雪を忍ぶ

市人ふしと是らむ雪の北窓 芭蕉

雪毎子梁の世に復たるる 日

名な家へある雪の影 大窪

節根越人もあると雪の雪 芭蕉

むやみ海に雪の山路が 大窪

中野一は人のあつらひ

雪の雪と雪師きの名目れ 芭蕉

吉甫より一とまきのあはれ南世と

あはれ雪の佛抱もなき猿衣

道信十方信とゆ

い雪をさへば、山初秋阿弥陀堂 大窪

弥川乃子彦と

米ふみ雪の杖の中 芭蕉

うらみぬ上野村 薩由雪の美 大宿

君火しけらばよの見世舞 吾れけ 芭蕉

鹿戸の陶器より家よ熱ひく

小宮電うせ雪の飛をさ揚てんむ 大宿

尾張の書肆 風月堂又頼人

あまひらり

いさくらを雪えし精ふ取ましく 芭蕉

月の如く山も連はしそ雪もか連 大宿

酒のあといふ編りきり木の音 芭蕉

おくれえき八月八あまらり雪の上 大宿

飛鳥井 雅章のきつしけ宿より

ら世路ひくちもよせく雪海

ちるけき海を中し居る

係路ひしきま

京あしはまのまをわお雪れあし 芭蕉

月のおお雪の体えの舟揚里 大宿

賀田官... ぐくありぬ

唐の... 鏡も... 雪の... 芭蕉

漢書の... 漢書... 千歳... 芭蕉

お... 西上の... 芭蕉

名... 小家... 芭蕉

よ... 芭蕉

波... 芭蕉

波... 千歳... 芭蕉

去年の... 芭蕉

二人... 芭蕉

お... 芭蕉

雪... 芭蕉

あ... 芭蕉

あ... 芭蕉

鹿... 芭蕉

雪... 芭蕉

湖の眺望

比良の上雪のけしきを眺むの情

芭蕉

有明の湖とくも雪の中

大窪

智月尼の雪

少羽の尼の岫 雪のけしき

芭蕉

雪のけしき 妙如の雪

大窪

小町画巻

雪のけしき 妙如の雪

芭蕉

旅の雪のけしき

雪のけしき 妙如の雪

大窪

雪のけしき

雪のけしき 妙如の雪

芭蕉

雪のけしき 妙如の雪

大窪

雪のけしき 妙如の雪

大窪

雪のけしき 妙如の雪

大窪

雪のけしき 妙如の雪

大窪

こめつけく雪見よまかる縁取がし
芭蕉

こ妻やうきまきり祝くみ

雪の煙りやうらまきく雪の息
大雀

お羽秋田乃空掛をよめう

旅人ハ船よけし移りおは雪
同

し子流走里あまうむ玉敷
芭蕉

お新さま拾ひよめく雲が
大雀

雑炊り琵琶きく朝の雲うら
芭蕉

いりめーきききやあまの橋本道
芭蕉

お拍子のつくおあはれ板底
大雀

膳所の軒庵を今小後いきて

おあせよ細代の沙魚煮ておきむ
芭蕉

おあー雪もあまむおれり
同

うささく雪の河柳おさしの雨
同

鴨鳴中雨のえくまきく雪れ
大雀

お雪の拍も雪照中乃小鳥れ
同

星露の露をよそおひて
芭蕉

秋実をひてちよりの露をよそく

あまの露の露をよそひてよそく

海の波にむすぶるよあけの露

色をみよる。望みぬの依病よそ

やろきく露をよそくよそく

露に海りておひぬちよる
大空

露のおおみよるよそくよそく
芭蕉

お牡丹ちよるよそくよそく
芭蕉

おきのの露をよそくよそく
大空

よそくよそくよそくよそく
月

伊呂古寄の南海也露のよそく

よそくよそくよそくよそく

よあ。草子杜國よそく

露の露をよそくよそく
芭蕉

露の露のよそくよそく
大空

月望に清る下らぬぬらぬる

大雀

弟崎八幡宮を舞うる子酒の

中を詠や。又東の空の雲も

人の志よりぬらぬらぬらぬら

河を渡る風を頼骨を割る

鴨の聲 断り去るあはれ也

同

酒善く鴨の聲仄ふ

芭蕉

毛衣よりみくぬらぬらぬら

同

如竜くく帆柱をき入江の船

芭蕉

燈籠の断り去る魚の柳

同

横濱の鹿角を去る一里頂上

大川燈籠の暮又中をうつる

白雪に波吐や小春に横山鳥

大雀

生かす羽の又波る生海蔵式

芭蕉

あゝぬまなきのぬらぬらぬら

同

かくけお顔もあるふはふは

同

雲雨

慈母の瓢箪の湯を七里迄

芭蕉

松葉を掃く手拭あつたは

曰

吉田の歌あつて人よあふ

をせられ二人旅籠をのりて

曰

夜のくも月影見ゆるを

大窪

仙化の文此追告

袖の色よと流るるを

芭蕉

長良川乃像儀

たさかたの志の舟の瓦

芭蕉

橋を渡る舟の影法師

曰

すくみはや馬より影法師

曰

鏡破る舟の影法師

曰

草舎買水

水苦く偃草子咽をく

曰

鐘の音あつたは池の水

大窪

見事の縁々たるあまのまゝの如
るより一日懸ふあまのまゝの如
大也
曰

長崎を立ち古賀よりあまのまゝの日既子暮
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如

あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如
あまのまゝの家母の言よりく宿からあまのまゝの如

〜もほほの〜み〜と〜

つ〜ひ〜

初めきあかく櫓の〜りち

大宮

風素寺且素...

おきり〜り〜る旅...

芭蕉

きり〜り〜る櫓...

同

古き世を思ひ〜

おの存撫子〜る〜

同

住つぬ旅のちや〜巨雄

芭蕉

おおくおち〜る櫓の〜

大宮

少年を〜る〜人子

埋中の消中洞乃高る音

芭蕉

宋彦

丈形は身も埋中のぬ〜る

大宮

曲翠う旅鼓み〜る

埋中おち〜る宮の新法寺

芭蕉

堀との口暮まき進ゆる藤の虫

大官

く舞も宜也乃藤も宜しの中

芭蕉

神叩き此衣ハ脱さし

大官

名雷の暮も巡る故神と此

芭蕉

板橋乃こちくハ暮只ちち扣

大官

納まきる音志るまき神叩

芭蕉

月雪の中神叩よハ何々ある

大官

清多此家暮く通進神叩

同

綱代古比良の高振る苦み事歎
昔季のいゝ暮もこと風雅も所之也

大官
芭蕉

琵琶島市

昔季のいゝ押のけく暮る馬の尻

大官

昔季のいゝ暮も此所ハ暮る

芭蕉

いささよお昔季のいゝ暮る

大官

年の方候暮賞も初や

芭蕉

梅も暮も此所も暮る

大官

河子に降きぬる日申くうら守 芭蕉

長崎月夜子あましく獲の浦輝り

先王兄母くくくわが侍息と

厚舟の向きともおきくき成 大官

月白き降きぬる子踏く藤えぬ 芭蕉

佐宿娘の宮ハ石女くく流きと抱て

水くくくくくくくくくくくく

子もあましく降きぬる山女向き成 大官

隠きぬる河まき水海のくくく 芭蕉

池の秋あましくは夜通くくく年の流きと

ふと舟もせぬや不晴の浮沈 大官

あましく降きぬるくくくくくくく 日

煉指中暮り宿のくくくく 芭蕉

青の舟に柏木あましくくくく 大官

縁箱くくくくくくくくくく 芭蕉

縁掃ハ杉のあましくくくく 日

蝶抄ハ己々納つる大工の如き

聖口神の丁を信子活あつて

身命の八不仁乃申仕仁也

小いぬ果敢あつて命仰る

とうちを渡りてくく

蝶抄お儀の存乃ぬゆり 大官

對つ人乃僧

あまの世に蝶抄子とまゝぬ古松子 芭蕉

市の中を歩つてすゝる獅子の如き 大官

有の由三十のよ近し従の如と 芭蕉

大地をうらつてハ

やうく身も壽はまらる餅の如き 大官

と色くく餅を餅の縁の如き 芭蕉

乙卯の卯宅ま壽をまらる

人子家以賞せく毎八年忌進 日

志くもさく我も年々まらる 大官

昔の如く年忘色す。横煙の如く
芭蕉

百ちく漏色朝の雀

千年の如く共の鶴

静の如く忘れし年忘れ
大官

叶は流るるの涙おらぬ
芭蕉

二十三夜

年忘色月ハ如く忘れし年忘れ
大官

魚の心ハ如く忘れし年忘れ
芭蕉

洛師靈別巻景龍丸魚行

半ハ神を交ふ由ト一日の如く
芭蕉

日まは流るる草飯子揚むと年の如く
同

暁庵の筆著今昔の如く
夜子

ちまの如く如く如く

年の如く如く如く
大官

猿の如く如く如く

く如く如く如く
芭蕉

舞のまゝぬきのかさよと〜

大正

とく〜い昔〜くらひさす〜

〜ゆきまじりて

冬〜く〜人のねも〜らむ老女善

芭蕉

月雪とのま〜ら〜年の善

同

ア〜さ〜く〜ま〜あ〜く〜子難え〜

〜ら〜ひ〜く〜書〜え〜小倉の橋〜

再入れ小倉のとり也

旅衣の〜ま〜と〜ぬき〜る〜

大正

ゆ〜る〜お〜瞬の〜流〜年の善

芭蕉

遊人〜あ〜る〜東も〜西も〜善

同

船の〜ま〜甲斐〜あ〜と〜ぬき〜

同

分のお〜危〜く〜さ〜ら〜年の〜純

同

旅通〜し〜降〜必〜り〜年の善

大正

家の構〜る〜菫は〜中の除の〜名は〜

同

故思は〜る〜ま〜く〜の〜由は〜あり

及古も清女納言の双葉の母もとの
 三十の年の刻子龜車まじりて
 とふの母年あつたまのえ日とふ且
 乃卯の刻子まじり孫おとやんしるまは
 宗能桃音居士の魂をうめたり
 名をうめぬ人まじりやつれまは
 代のおき人まじりまじり三十の年の
 宗子とあるあまのいさ香燈むしめ

探らぬ横さやまむあつた
 心筒まきまきね

舟の浮や年の終りて鬼まつま	大やま
くま道りや舟の船繩子取つて	芭蕉
代る丁子まじりまじり	大宮
時あ申く本弓や舟のこまは	同
あつてまじりまじり	同
屏風まじりまじり	芭蕉

白炭や浦崎の子の老女の箱

芭蕉

こころし中四六仕つける妻のしほ

大空

芭蕉と趙南のありとつる

山家集に於て又雪ふ

一家もこほさぬ菊の砂の那

芭蕉

瓶破る娘の氷に烏毛は

曰

落紗折目の候は柔巾が

曰

雪かきふる雪ハ小娘が

曰

妻里のあり

こころしのを山妻を海の及び

大空

十月や蠟燭みつく湯むら

曰

篋割る竹の小村の小春のちま

曰

うつらぎ山妻の雪の下あま

曰

子田の雪あり

さるる洞や深くちるもくも

芭蕉

舟玉の波をこせし雪子る

大空

馬を飼ちりの中は浮きあふ
大喧

海にける魚の油やわらわら
同

るほしく交を陰子なる柏堂
芭蕉

あそぬことそまうし雪のあそ
大喧

古杭のま尻口ふし山由河原
同

杜國の不幸をいふと端のなき

まきくくし隠し家あけ村
芭蕉

まきくも祝の初をそのりし
同

新月ゆ火桶子くる古きつぎ
大喧

周防の山かこいて

一抱我を禁うせよと後禁う筆
同

志賀の娘ハあそぶしをり終くのはも

久しうりやま久しく信る人を訪ひて

山原のあそびむしあそびた直さ
同

子をまひいへ人乃もあそぶ

炭の火は皆あそび癒るあそび外
同

遠路の草やうきるゝをぬく
大喧

やうきところへ白くしやの蝶
同

京をさぐるまゝのついでを
同

深井をよこめ

おまをさるゝせうくおきて古倉
同

病入りくちのきさうりおのあり
同

東山平子日あり

西山より月あり

おまの淵まじりゆ涼いり
大喧

月影の来るまじり玉火桶式
同

おひ切てる晴まじりあえ
同

程まじり降まじりまじり
同

浪まじりおまじりあえ月
同

おま子まじりおまじり
芭蕉

おまお庭はり次のおま
大喧

おまお雪おまおま
同

雪の影をくぐりて籠とてゆく

芭蕉

枕相室の蘇我計八方知を送る

子日の新作也

月雪の白ひおどり蘇我計

大守

雪つおお思ふほろよのあけ

同

と影の雪をさくく向ふもあふる

同

三十年を跨ぐ古きよのあふ

雪をくぐり又落しぬ世は忘る

同

月雪の中月ハ雪を山はく

大守

有の如雪を山はくあけの影

同

雪をさくく影をさくくあけの影

同

杖をさく雪をさくくあけの影

同

次子の延喜此年取ものあけ

芭蕉

雪の中おどりあけの影

大守

あけの影をさくくあけの影

同

月雪の中おどりあけの影

芭蕉

信り初身を止蓮菜子候負其の事

芭蕉

美し由門ハ分たて其世末大根

大徳

首のちと縁すふ蝶の世は事

同

あしとふも二りそりよありぬ

居れぬい路を降地をく

妻やうそりのとけれをく

例のここ子ありそりなれ

高しやうすらひいし山折る宮

華しくおとろくるといひ

と鳥をたると

白雲の中より逢れ花ひけ

大徳

花鳥の部

さけつゝおの人の画

うむもあそくほのお部

芭蕉

記作あり

つらつらとく鶴のあまの浦

大官

幸名らうり子年く城の若うも

心つらく存鶴うらま

新りあも枝窓地を落るが

芭蕉

二

新野川河先川中流のてま

大官

竹う節あああう地いのちか

同

布袋画賛

物ほし手袋の中は月と花

芭蕉

鶴

一帯も起る如き鶴の四時式

此書よのつはしあまはう一年

三百五十余日日新うらま

日く子新あまあうらま

万葉又不憂

大官

青於集全部五卷

一樹菴楚山著

懷仙堂大巢校

一之卷

春季

既出板

二之卷

夏季

既出板

三之卷

秋季

既出板

四之卷

冬季

既出板

五之卷

雜句文章類

已夏出板

